

この WMO の会議は良かれ悪しかれ世界における気象制御の分野の現状を一部の課題を除いて代表しており、その現在における技術的問題点は、アイデアとそれに基づく優れた仮説の不足にあると思われる。そして自分自身、微物理の分野で主に研究していることもあって、筆者はより良い種の開発の不足と、そのスマートな使用の欠除を具体的にあげる。

世界の現状をこの WMO の会議を通して紹介し、日本のこの分野の現状をみると、関連分野と比べ片手落ちの感を受ける。気象制御は自然の中で独り出に起きない現象を人工的に起こして利用するもので、自然に起こる

現象のみを研究していてもその目的を達する技術を作り出すことはできない。この意味で、気象制御の基礎研究は、一般のすなわち自然に起こる現象に対する基礎研究と並立するものである。筆者は気象制御の技術が日本の社会に何らかの形で役立つと信ずる者であるから、その研究を他の関連分野と釣り合うまでレベルアップすることを望む。なおその目的と一般の自然現象の研究の目的で、樋口敬二が本誌で提案したように、計器を積んだ航空機を1日も早く所持、使用できるようにすることを進言したい。

第21期第2回理事会議事録

日時 昭和55年10月29日(水) 18.00~19.30

場所 京都教育文化センター

出席者 岸保, 小平, 浅井, 荒井, 内田, 杉村, 竹内, 二宮, 増田, 村山 以上常任理事
菊地, 藤原, 武田, 山元, 中島, 藤範, 伊藤, 坂上 以上理事

議題

1. 昭和56年度第1次予算(案)について

荒井理事から予算(案)編成は、ほぼ前年と同様に組んだが、主な点は次のとおりであると説明が行われた。(1)「気象研究ノート」の収入減は、年間6冊の計画を5冊(600頁)にしたこと、単価の算出方法を変えたためである。(2)その他の収入減は、「続・気象学の手引」がなくなったためである。(3)印刷製本費の減は、役員選挙がなくなったこと。(4)税の見直しが行われ、大巾に上廻ることになった。来年度は税理士にみてもらうこととした。(5)「天気」の衛星写真は、当初は中止する計画であったが編集委員会の要望により引き続いて掲載する。(6)会議費のうち、筑波の気象研究所から来る交通費の不足として各委員会に5000円を追加した。(7)「天気」「気象集誌」とも予定よりも増頁となっているので実情に合うように改めたい。(8)大会を円滑に運営するために、第1日目に座長と屋敷を共に懇談会を持つことにした。(9)文部省学

術用語気象学編改正版を作るためのアルバイト費として20万円を計上。(10)事務局職員の昇給については、前期担当理事からの引き継ぎ事項になっているので、余裕があれば特別昇給ということで1号アップしたい。(内規では、満60才以上の事務職員は、原則として昇給は行わない。)

以上、第1次予算(案)に増額分129万円を上乗せして修正したい。なお、地方理事の方には、後からでもご意見を出していただくようお願いする、とつけ加えられた。これらに対し、税金の件、「気象研究ノート」の年間発行冊数について質疑が行われたが、ノートの発行部数を減らすこと、年間では、6冊用意しており、今年度は、5冊出せそうである。理事長から各支部においても税金の件については、考慮しておかれるよう要望があった。

2. 大会運営について

増田理事から秋季大会が関西支部及び京都大学の協力により円滑に運営されている旨の謝辞が述べられた。なお次のとおり説明が行われた。

(1) 次の講演者のため椅子が用意しており、時間の無駄がなくなった。(2)初めて座長会議を行ったが、貴重なご意見を伺って大変有意義であった。特に山元竜三郎氏、伊藤昭三氏等から次のような適切な意見が寄せられた。ア. 年々講演数が多くなって

きているが、会期を3日以上にすることは困難である。イ、講演時間の問題、1題30分かけてもよいものもあり、申込の時期を早めて、予稿集の原稿を2人のレフリーに見てもらおう。ウ、中間報告的なもの、新しい測器の紹介等は5分位にする。エ、講演内容を廊下等に掲示しておく、いわゆるポスターセッションを考える。オ、予稿集を現行の1頁から2頁にして、完べきのものにして、予稿集のままで講演発表する。カ、春季大会は、総会のあと各賞の講演会が行われるためシンポジウムが窮屈となり、スケジュールが困難となる。これらに対し、重大な問題だけに次のような多くの意見が出た。a) 来年の春季大会は、東京大学が引き受けることになったのでその意向を汲んで欲しい。b) 予稿集を2頁にすれば講演数が減るのではないか。それで解決されるのか疑問である。c) 予稿集のページチャージを取ることも一方法である。d) ポスターセッションは、来てくれればよいが来ないと困り、意味がない。e) 気象学会は、講演会を拡充すれば大会での講演数が減るのではないか。f) 昼の休憩時間を20分にするとか18時30分まで延長するとかして時間をかせぐ。大会前日の午後から行き、最終日は午前中とすることも考えられる。g) 予稿集をもう1か月早めたらどうか。h) 余り学会活動をおさえることは好ましくない。以上の意見に対し、少しずつ変えてゆく、講演数が増ければ18時30分までとすることにする。

3. 100周年記念事業について

さきの全国理事会で説明してあるとおりで、国際的な会合については、前の報告以上に進んでいない。

「天気」特別号の内容を充実するために、各会員から

アンケートをもらったが、112通に達し、内容の紹介があった。アンケートは、まとめて「天気」に掲載したい。

4. 各委員会委員について

第21期の各委員会委員を承認

5. その他 1985年 IAMAP の総会の誘致について
山元理事から IAMAP 第4回(1985年)の誘致について説明があった。

(1) 正式決定：第3回総会(1981年8月17日～同28日 Hamburg)

(2) 正式誘致：地物研連 気象分科会(實際上、日本気象学会等の支持が不可欠)

(3) 予算 (Ruttenberg による)

必要経費	\$150,000	約37(百万円)
収入		
登録料	\$80×600=\$4,800	約12(百万円)
学術会議		約4(百万円)
寄附		約21(百万円)
計		約37(百万円)

(4) 代表責任者：

(5) 開催場所：(参考) 京都国際会議場の場合、会議室使用料概算5(百万円)。その他連絡バスが必要。

気象学会でサポートするかしないかについて理事会で決めてもらいたいとの提案に対し、気象学会としては1985年に実現することが望ましいし、できるだけ協力することにしたい。終りに、岸保理事長から、今回の秋季大会の開催について、山元関西支部長、藤範大阪管区気象台長および支部、京都大学の各役員に大変ご配慮いただき、深謝する旨謝辞が述べられた。

承認事項 松本崇司ほか9名の新入会員を承認。